

第54回 初期松江城天守と千鳥破風

平成27年10月に開催された松江城関連の委員会で、委員の一人から資料に掲載された天守の絵図について質問があった。「この絵図には変な天守が描かれているが、これは本当に松江城か？こうありたいと思った姿か？」というものである。この絵図とは「出雲国松江城絵図(いわゆる正保城絵図)」のことで、城郭内に描かれた天守は現在の松江城天守とは外観が異なり、二層目、三層目に「千鳥破風」が描かれ、四層目には「唐破風」が描かれていた。私は事務局側の一員として参加していたので、かつて旧知の城郭研究家から「出雲国松江城絵図」について聞いた、「実態とかけ離れた天守を描いて幕府に提出したものでは」という言葉を念頭に、「松江城郭絵図のうち、天守が描かれたものは点々とあるが、デフォルメされたものもある」と返答した。すると、その委員会に参加しておられた中井均先生から、「これは正保年間の城絵図なのでインチキは書けない。幕府に提出する絵図」とのご指摘があり、現在と異なる天守図の意味は分からなかったが、その場はそのまま終わった。

中井先生のご指摘が気に入り、松江城部会(平成28年2月開催)のための城郭図資料作成に併せ、史料編纂室で確認している城郭絵図から立体的に描写された天守図のみを抜き出し、年代順に並べてみて驚いた(図(1)から(12))。「千鳥破風」が描かれるなど現在の天守と異なる外観をもつ天守図は、図(1)「出雲国松江城絵図(正保城絵図)」(正保年間:1644から1648)、図(2)「出雲国松江城之絵図」(延宝2年:1672)の2枚であるが、これは天守を描いたものとしては最も古い2枚であり、細部を丁寧に描きこんでいる。一方、簡略な描き方のものを除けば、図(4)「松江城郭図」(元文3年:1738)以降の天守図は現在の天守の外観に近いのである。これまでの見解とは異なり、「出雲国松江城絵図(正保城絵図)」、「出雲国松江城之絵図」は初期の天守の姿をかなり正確に描いたものではないか、との思いが頭をよぎった。

松江城部会の先生方や関係者にご意見を伺ったところ、中井均先生も前述の委員会後、「正保城絵図」が気になっておられたようで、比較研究のために全国の「正保城絵図」に描かれた天守図を集成してみると言っていた。和田嘉有先生からは、「須田主殿編『城郭史から見た松江城天守と昭和の修理』には、いろいろ気になる記述があり、千鳥破風についての記述も2か所ある」と、卜部国宝化推進室長からは、「昭和26年の新聞に千鳥破風に関する記事があり、西和夫先生も『重要文化財松江城天守修理工事報告書』(1955年)の「二重屋根妻立の位置」について言及しておられる」とご教示いただいた。

その後、伊藤孝一さんと天守内部の撮影を行った折に、「出雲国松江城絵図(正保城絵図)」に描かれた二層目(内部2階)、三層目(内部3階)の「千鳥破風」部分、四層目(内部4階)の「唐破風」部分を集中的に見て回った。すると、また驚いたことに、古柱が残る内部2階東側には、「石落とし」を挟んで左右(南・北)の古柱に4か所の「貫跡」が確認でき、その位置は、「出雲国松江城絵図(正保城絵図)」に描かれた二層目の「千鳥破風」に矛盾しなかった。また、内部4階の東西それぞれの落床横の2本の柱にも、「貫跡」が確認でき、これまた「出雲国松江城絵図(正保城絵図)」に描かれた四層目の「唐破風」に矛盾しないように思われた。なお、和田嘉宥先生に柱の痕跡について報告すると、直ぐにこれらの「貫跡」を確認いただき、内部2階東側の柱の「貫跡」の背面(東面)にはほぼ水平と思われる横架材を架けた跡が確認されたこと(南から2本目の柱の背面(東面)は石落としとなっているため)、この柱に巻かれている帯鉄は壁漆喰を塗る(石落としの袴を東面に添える)前に柱に巻かれているので、かなり早い時期に柱に巻かれていたと考えられることなどの貴重な指摘を受けた。

以上のように、城郭図に描かれた天守(図(1)から(12))と、柱の「貫跡」の検討から、「出雲国松江城絵図(正保城絵図)」(正保年間:1644から1648)、「出雲国松江城之絵図」(延宝2年:1672)に描かれた天守の姿こそ、初期の松江城天守の姿と想定してみると、これまで知られてきた文献史料も別の見方ができるように思われる。

一つは、17世紀後半に現在の形になったとされる「(竹内右兵衛書つけ)」である。(和田嘉宥「解題『竹内右兵衛書つけ』」『松江城研究』1、なお、文中には正徳3年(1713)までの年紀も記されている)文中の天守の記述の一部に「二重目也西二破風有り」とあるが、「破風有り」の記述をあえて見せ消し(朱線)で消している。これまで、あまり注目されなかった箇所であるが、「(竹内右兵衛書つけ)」が成立した時には天守には「破風有り」であったが、後にこれを抹消するような状況になったと考えれば、実はこの記述は城郭図に描かれた天守の変遷と矛盾しないこととなる。

また、和田嘉宥先生の研究により、松江城は、築城から百余年後の元文3年(1738)より寛保3年(1743)にかけて、江戸時代最大の改修が行われたことが知られているが、現在の松江城の外観となる改修(四重の唐破風、出窓の撤去と東西の大破風設置など)が或る時期に行われたとすれば、この元文3年(1738)から寛保3年(1743)の大修理に伴って行われたと考えられはしまいか。とすれば、これまで様々な作成年が指摘されてきた「松江城天守雛形」(松江市指定文化財)は、この大改修を行うために作られた模型である可能性が考えられる。

さらに、史料編纂室で確認した範囲内では、松江城を「千鳥城」と明記する近世の史料は、「千鳥城取立古説」（元禄元年（1688）には原形となる本が成立か）、「明和四年亥改め」との付記がある「雲陽大数録」（明和4年（1767）から天明2年（1782）成立）、「出雲私史」（文久2年（1862）頃か）以外には確認できない。「出雲私史」には「地を亀田山といひ、城を千鳥城といふ、皆旧地名に依れるなり、乃ち徒つて之に居る」とあり、「千鳥城」の名称は古来からの「旧地名に依れる」としていることから、藩儒桃節山が「出雲私史」を著した頃には、時間の経過により既に本来の名称由来が分からなくなっていたとも考えられる。松江城を「千鳥城」と呼ぶのは、「初期松江城天守の外観(千鳥破風)によるもの」という仮説が許されるとすれば、その後、城の外観の変化とともに「千鳥城」の名称が用いられなくなった（由来が分からなくなった）が、明治以降に広域的な名称を付す過程で、「雲陽大数録」、「千鳥城取立古説」、「出雲私史」などから、「松江城」とともに「千鳥城」とも呼ぶようになったのでは・・・?とも思われる。

これらのことから、松江城天守の外観について整理できること、推測できることは次の点である。

(1) 「出雲国松江城絵図(いわゆる正保城絵図)」（正保年間:1644から1648）、「出雲国松江城之絵図」(延宝2年:1672)には二層目東（おそらく西も）、三層目南（おそらく北も）に千鳥破風が描かれ、四層目東（おそらく西も）に唐破風が描かれているが、「松江城郭図」(元文3年:1738)以降の天守の図には二層目、三層目の「千鳥破風」は描かれていない。

(2) 17世紀後半に現在の形になったとされる「(竹内右兵衛書つけ)」には、天守の記述として「二重目也西二破風有り」と、「破風有り」の記述をあえて見せ消し（朱線）で消している。「竹内右兵衛書つけ」が成立した時には天守には「出雲国松江城絵図(いわゆる正保城絵図)」に描かれたような「破風」があったが、後にこれが撤去されたことを示している可能性がある。

(3) 現在の松江城天守の古柱を詳細に見ると、二重目東側には千鳥破風があったことを連想させる「貫跡」が内部2階東の4本の古柱に4か所残っている。このうち1本の「貫跡」背面（外側）には、外面に向かってほぼ水平だったと思われる横架材を架けた跡が確認される。また、現在の内部4階東及び西の落床（いずれも2坪）の境の柱にも、「貫跡」があり、「出雲国松江城絵図(正保城絵図)」四重東側の描写（唐破風、出窓状）と矛盾しない構造であった可能性がある。

(4) 松江城天守は、元文3年(1738)より寛保3年(1743)にかけて、江戸時代最大の改修が行われており、この時、現在の松江城天守の外観となる改修（四重の唐破風、出窓の撤去と東及び西の大破風設置）が行われた可能性が考えられる？とすれば、「松江城天守雛形」は、この大改修を行うために作られた模型である可能性も考慮したい。

(5) 「千鳥城」と明記する近世の史料は、「千鳥城取立古説」（元禄元年（1688）には原形となる本が成立か）、「雲陽大数録」（明和4年（1767）から天明2年(1782)）、「出雲私史」（文久2年（1862）頃か）以外には確認できず、松江城を「千鳥城」と呼ぶのは初期松江城の外観から来たもので、その後城の外観の変化とともに用いられなくなった（名称由来が分からなくなった）ものが、広域的な名称を付す必要から、明治以降に「松江城」とともに「千鳥城」とも呼ぶようになったのでは・・・？とも思われる。

[本コラムは、初期松江城天守と千鳥破風について整理を試み、下案としてまとめたものである。今回、松江城の調査研究を進めるうえで重要な視点と考え、初期松江城天守の外観は「出雲国松江城絵図(いわゆる正保城絵図)」、「出雲国松江城之絵図」に描かれたような形態ではなかったかと想定し、ご叱正を覚悟であえて提起したが、残念ながら初期松江城天守の外観を明確に記録した一次的な史料により説明できたわけではない。今後とも、識者の御教示を仰ぐ次第である。また、絵図の外観から見た天守の層を（一層、二層・・・）と、天守内部の階を（内部1階、内部2階・・・）と便宜的に表記した。]

(平成28年4月1日/史料編纂課長/稲田信)

図(1) 出雲国松江城絵図(正保城絵図) (1644~1648)

図(2) 出雲国松江城之絵図 延宝2年(1672)

図(3) 松江城及城下古図 天和3年~元禄5年(1683~1692)



図(4) 松江城葺図 元文3年(1738)



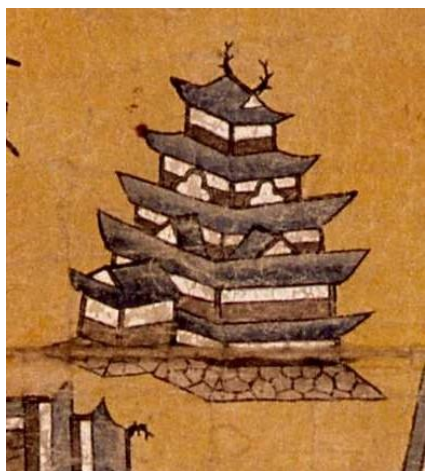
図(5) 松江城下絵図 元文から延享年間(1736から1748)



図(6) 諸国城葺修復図 安永二年(1773)



図(7) 松江城郭古図安永7年(1778)



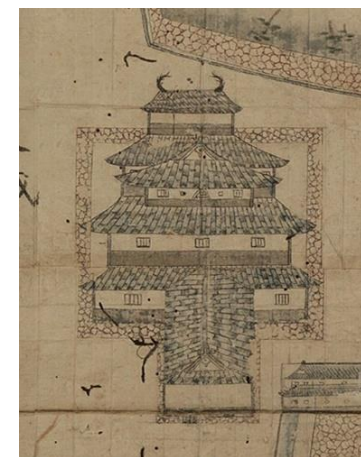
図(8) 雲州松江(乗命) 江戸中期頃



図(9) 出雲国松江本城図元治元年(1865)



図(10) 御城内絵図面明治5年(1872)



図(11) 松江城鳥瞰図



図(12) 松江城亭閣明治42年(1909)



↓天守内部2階東側北「貫跡」(白四角)千鳥破風?(点線)



↓天守内部4階西側「貫跡」(白四角)



↓天守内部4階東側「貫跡」(白四角)



↓天守内部4階東側「貫跡」(白四角)



↓「(竹内宇兵衛書つけ)」「二重目也西二破風有り」の記載部分



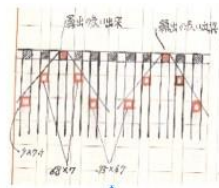
↓和田嘉有先生提供須田主殿編『城郭史から見た松江城天守と昭和の修理』の

気になる記述。千鳥破風についての記述も2ヶ所ある。

↓和田嘉有先生提供。天守二階東側南貫跡2本面の貫跡の背面(東面)には横架材を

架けた跡が確認できる。(2本目の柱の背面(東面)は石落としとなっているため)

(三) 天守の構造と表現
松江城天守の構造並に表現については鳥羽正種先生の著なる「城郭研究」や古川重春氏の著「日本城郭考」等を参照して概観をのべることにする。
松江城はその雅名を千鳥城と呼ばれるが、千鳥と云うのは何時の頃から呼ばれたものか明確な文献を欠いているが「雲陽大教録(明暦年間頃)」に「亀田山千鳥城」と記載されているから或は築城当初からかく呼称されたものならんか。



一重の特種な出梁
左図■柱には棟木と思われる仕口穴が存し、是れ等三点を結ぶと千鳥棟の形状をなし、当初は千鳥破風が初重にあったのではあるまいかと想像される。延宝の古図には千鳥棟が描かれて居るが、此の絵が実写か想像図か明らかでない。

